

パキスタンのキリスト教徒

(PALABRA 528, XI-07)

2007年8月14日、パキスタンは独立60周年を迎えた。10月2日、ムシャラフ大統領がクーデターで権力を握って8年がたった。10月6日に行われた大統領選挙は、確かに現職大統領の圧倒的勝利であった。(中略)。今は来年の1月に議会選挙が予定されている。

ムシャラフは勝利が決定するや否や、ここ数ヶ月勢いを増しているテロとの戦いのために、すべての政治勢力に「一致と協力」を呼びかけた。実際、ムシャラフがイスラマバードのモスクを占領していた過激派学生の攻撃を軍に命じてから、北部の部族のリーダーやアフガニスタンとの国境地帯のタリバンの民兵たちはテロ活動を激化させている。

(下略)

キリスト教徒の状況

キリスト教徒たちは最近のテロの攻勢に被害を受けている。パキスタンの司教団の「正義と平和」委員会は同国北部のキリスト教徒を目標とした暴力行為の激化に危惧を表明した。「政府軍がイスラマバードのモスクを武力制圧した後、暴力行為が増加し、数多くのキリスト教徒の家族がその地方から立ち退きを余儀なくされている」と。

9月15日には、およそ800世帯のキリスト教徒の家族が住むバンヌー地区にあるカトリックの聖ヨハネ・ボスコ学院で爆弾が爆発した。この学校はキリスト教徒とイスラム教徒を同じ割合で受け入れている。同じ9月、スワット地区のサンゴタのカトリックの学校が、自爆テロの脅迫を受けて、閉鎖を余儀なくされた。

ラホール大司教で司教協議会の会長を務める Saldanha 司教は、この種の暴力を防ぐためのより真摯な努力を政府に要求した。

正義と平和協議会の執行部の書記である Peter Jacob 神父によれば、「イスラマバードのモスクでの衝突によって、あの学校では宗教を教えるよりも、むしろ若者を暴力に導く指導が行われていたことが明らかになった。あのモスクの二人の所有者は Zia ul Hud 将軍の下に成長した兄弟で、若者たちをアフガニスタンに送ってジハードに参加させている」

同神父は、「彼らはタリバンの生活様式を理想とし、この地にもそれを移入しようとしている」と言う。

他方、「こういうことが首都で起こっているという事実が、人々に治安の悪化を感じさせ、なかでも宗教的マイノリティーを不安に陥れている」

貧しいが熱心な信者たち

差別に苦しむだけでなく、多くのキリスト教共同体は憂うべき貧困状態にある、と Lawrence John Saldanha 大司教は指摘する。

師は現状を以下のように描く。「私たちは貧しく、のけ者にされ、差別されている。しかし、

信仰において堅固である」と。キリスト教徒は数多くはないが、「自らの信仰に誇りを持ち、それに踏みとどまりたいと思っている」。実際、毎日曜日、教会堂は信者で一杯である。一般にパキスタン人は宗教心が強い、ということに一つの理由があろう。イスラム教徒もかなり宗教的である。

毎年、少なからざる改宗があるが、それを言いふらすことは賢明ではない。イスラム教徒が洗礼を受ければ、彼は背教者と見なされ、その瞬間から死の危険に曝されるからだ。

修道者の召し出しの数はここ数年下降気味であるが、現在パキスタンで働いている修道者のほとんどは現地人である。他方、司祭の召し出しは維持されている。

増加したのは将来の不安感である。1952年からパキスタンで働いているマリアの宣教フランシスコ会士、シスター・ホアナ（スペイン人）は「私は55年間のこの国で働いてきましたが、状況は今が一番悪いです。例のモスクの事件は今までなかったものを生みました。それは恐れです。私たちみな恐れています」と認める。

ラホール大司教によると、同国のキリスト教徒は大部分が中流か下層の階級に属し、十分な教育を受けていない。その上、「貧困のために、親は子供を学校に行かせず、家族の収入を少しでも増やすために仕事をさせる傾向にある」と言う。

この状況はキリスト教徒に限ったことではない。総人口の33%が貧困と境を接する生活をし、都市と農村の経済格差は広がっている。

キリスト教徒にとっての別の困難はほとんど隔離状態にあることである。「社会的障壁が存在し、キリスト教徒にはイスラム教徒と同じ人権が認められていない。・・それだけではなく、中近東の政治的衝突のために、キリスト教徒は西欧と同一視され、このことが教会やカトリックの施設に対する暴力を煽っている」と大司教は説明する。しかしながら、司教団は「異なる宗教間の対話を促進し、他の宗教の人たちとの連帯感を醸成するために、信者たちに国家の祝祭を祝うことを勧めている」

しかしながら、宗教間の関係は緊張している。イスラム過激派による少数派に対する暴力を伴った差別が大きく広がっているからである。このため、教会は多くのパキスタン人の信者が安全を求めて国外に逃亡することをどうすることもできなかった。

それにしても、Saldanha 大司教は未来に対してどちらかというと楽観的な考えを抱いている。少なくとも「去年は、比較的平和な一年だった。パキスタン政府は不寛容な国というイメージを払拭しようとして、宗教観の対話を励まし、よい穏健なイメージを作ろうとしている」からだ。

ラホールの神学研究所所長の Emmanuel Asi 神父の見解では、キリスト教共同体は「社会的差別と政治的抑圧と迫害」を受けている。キリスト教徒は二級の市民と考えられ、最も基本的な人権さえ拒まれている。

イスラム国家

パキスタンの最高裁判所は選挙結果の発表をラマダンの後の平日にまで延ばしたが、この

事実はイスラム教が社会にいかに大きな影響を与えているかを如実に示す。この国は穏健なイスラム教を奉じているにもかかわらず、である。1億6千8百万の総人口の96%がイスラム教徒であることは当然重みを持つ。その他に、イスラム教は国家の宗教であると憲法に定められており、大統領や首相はイスラム教徒でなくてはならないとの決まりもある。かつてインドとパキスタンが分裂したのも、インドがヒンドゥー教、パキスタンがイスラム教を選んだことが原因であった。

8月25日、パキスタンのキリスト教国民党(PCNP)は最高議会に、非イスラム教徒に大統領職を拒んでいる憲法第41条の改正と、この種の差別を廃止するよう申請した。(実際、全議員と主要な官僚は、イスラム教の国家宗教としての地位を擁護することを宣誓する義務がある)。

PCNPは、憲法41条が、すべての国民に法の前での身分と権利と安全の平等を保証する25条と36条と両立しないと主張する。さらにPCNPは、宗教差別は世界人権宣言だけでなくパキスタンの生みの親であるアリー・ジンナーの望みにも反すると指摘する。ジンナーは60年前、いかなる種類の差別もない、みなが自由な国民からなる国家を夢見ていたのではないかと。

PCNPはまた、最高裁判所がこの要求を却下する場合、国際裁判所に提訴する考えのあることを表明している。

イスラム侮辱罪

刑法295条-bというものがある。これはマホメットやイスラムの聖典に対するあらゆる侮辱を罰する規定であるが、攻撃的で不寛容なものである。と言うのも、いかなる行為や言葉が冒瀆と規定されるかについては極めて曖昧だからである。

大統領選挙の陰で、2006年からコーランに対する冒瀆罪で刑務所に留置されていたSharin Maizという18歳のキリスト教徒の青年が釈放された。

控訴審において彼は無罪と認められたのだ。同時に共犯の容疑を受けていたShadih Masihも無罪を宣言された。ただし、こちらはイスラム教徒ということで、すでに9ヶ月前に秘密裏に釈放されていた。

この二人の青年はArshad Masoodという医者によって告発された。この医者は自分の医院で彼らがこっそりコーランの多くの頁を焼いていたと訴えたのである。

Shahidの父親は息子の無罪放免を喜んだが、彼の投獄の報を受けて母親が心配のあまり死んでしまったことを嘆いている。

ファサルバード教区の宗教間対話とエキュメニズム委員会の委員長であるAftab James Paulは刑法295条-b項は廃止されるべきであると主張する。なぜなら、「冒瀆罪の告発はほとんどいつも敵対関係にある相手や経済的な競争相手を消すためにねつ造される、悪意の訴えであるからだ。」

Adal Trust(キリスト教法律相談センター)の所長で、Shahidの弁護士を務めたKhalil Tahirは「シャーヒブは最終的に刑務所から放免されたが、この冒瀆罪の悪意の訴えについても、か

わいそうな被告の家族が受けた精神的苦悩についても、母親の死についても、誰も罪に問われることがない。このようにして次から次へと悪意の訴えが起こるのである」と強調する。

同所長はさらに JamesButa と Masih という二人のカトリック信者（それぞれ 70 歳と 65 歳で両者とも病人）の場合を紹介する。彼らは 2006 年に同じくイスラムを冒涇したかどで訴えられた。ファイサルバードの裁判所は、過激派の圧力に屈し、彼らに 10 年の禁固刑と 2 万 5 千ルピーの罰金刑の判決を下した。

5 月にはコーランを焼いたというかどで 84 歳のキリスト信者 Walter Fazal Khan が訴えられた。彼の家族はこの訴えが事実無根であり、告訴人のイスラム教徒は被告の土地を安く手に入れるためにこの訴えを起こしたと主張している。

ここ 1 年の間、少なくとも 25 人のアフマディーヤ派（イスラムの異端）と 10 人のキリスト教徒、そして 6 人のイスラム教徒がイスラム冒涇のかどで逮捕され、多くは未だ牢獄にいる。

ラホールの大司教によれば、イスラム冒涇罪で訴えられた 800 件のうち、約半分がイスラム教徒関係で、キリスト教徒が被告になるのは 13% である。大司教は、両宗教の信者の比率を見ると、キリスト教徒が被害に会う場合が異常に多いことが分かるという。

そして、「冒涇罪はキリスト教徒に重くのしかかっている。過激派は罪が証明されるのを待たずに、被疑者を罰しようとする」と嘆く。

宗教の自由の欠如

これまで述べたことで、この 9 月 14 日に発表されたアメリカ合衆国政府の宗教の自由についての白書が、パキスタンを特別に憂慮される国（ビルマ、北朝鮮、中国、サウジアラビア、スーダン、トルクメニスタン、ベトナム、ウズベキスタン）に含めたこともうなずけよう。（略）

同白書によれば、パキスタンはこの一年に「宗教的少数派に対する態度を改善するための行動を取った。しかしながら、差別的な法律が存続し、政府も過激派グループが不寛容を促進したり宗教的少数派を脅迫したりするのを見逃し、暴力行為も見て見ぬふりをしている。つまり、憂慮すべき問題は依然として解決されていない。」

白書が示す具体的事例としては、パキスタン政府は、スンナ派の過激派たちが他の宗教の信者を標的にしている攻撃に対して、何の適切な処置も執っていないことを挙げる。その上、宗教上の差別的な法律が依然有効で、前述のように冒涇罪による不正な拘留が続いている。パキスタン議会は、2004 年にこの法律の適用に関しての乱用を防ぐため容疑者の拘留の前に警察が告訴の真偽を確かめるといった条項を盛り込んだ改革法案を可決したが、乱用は相変わらず後を絶たない。

また最後に、「何千ものイスラム神学校の過激な傾向を改革によって抑える努力は、遅きに逸し、ほとんど効果が上がっていない」と結論する。現在この国にある 1 万 7 千（1980 年には 700 もなかった）にも及ぶこの種の学校は不寛容なイスラムを教え続けている。

法律上の差別は、特に女性と宗教的少数派を抑圧している。たとえば、Hudud の法令はコーランに基づき、イスラムの教えと両立しない振る舞いを罰する。

さらなる規制

パキスタンの憲法は、「国民は誰でも自分の宗教を信仰し実践し広める権利を持つ」と定めている。しかし、同時に法律がイスラムと合致することを要求する。このために、当局は少数派の宗教に制限を加えることが許されていると考える。特に、その宗教的実践がイスラムにとっては異端と考えられるアフマディーヤ派は禁止される。1974年になされた憲法改正によって、アフマディーヤ派はイスラムではないと宣言された。彼らがイスラムを自称すること、説教をすること、自らの宗派に勧誘することは禁じられ、それを破ると3年の禁固刑に処せられる。

他の少数派の宗教に対しては礼拝と活動の自由が認められているが、公の行為になると一定の制限が加えられる。いずれにしても、イスラム側の強い圧力によって、真の礼拝の自由と言えるものはない。

Almadí を除くと、様々な宣教活動が行われている。とは言え、イスラムに対する侮蔑的な説教は禁固刑で罰せられる。パキスタンに入国するためには、2年から5年の有効期限をもつビザが必要である。ビザの更新の手続きは容易ではない。

国民はパスポートか身分証明書に自分の宗教を書き込まねばならない。学生も、大学に入学するために、自己の宗教を学生証に書き込む必要がある。

(略)

また表現の自由も、「イスラムの栄光のために」制限を受ける。

若干のデータ

パキスタンは1947年から独立国、イスラムの共和国。イスラム教が国家の宗教。ウルドゥー語が公式言語。英語も話される。

人口は1億6千8百万人。イスラム教徒が96%（スンナ派、80%：シーア派、20%）、キリスト教徒は2%（カトリックは1%）、ヒन्दゥー教徒は1%。この他、ゾロアスター教徒、シーク教徒、仏教徒もそれぞれ2万人の信者が存在。0.5%が無宗教を自称。1998年の調査では、人口の増加は年3%。

カトリック教会関係のデータ

信者数、120万人。 教区数、7。 司教、8人。

教区司祭、145人。 修道司祭、124人。 神学生、102人

司祭でない修道士、58人。 修道女、781人

受洗者数、20121人（7歳以上が3117人）

福祉施設、140。 教育施設、650（生徒数、16万人）

カトリック信者の70%は英語を話す人々。